鄂長明之訪之記

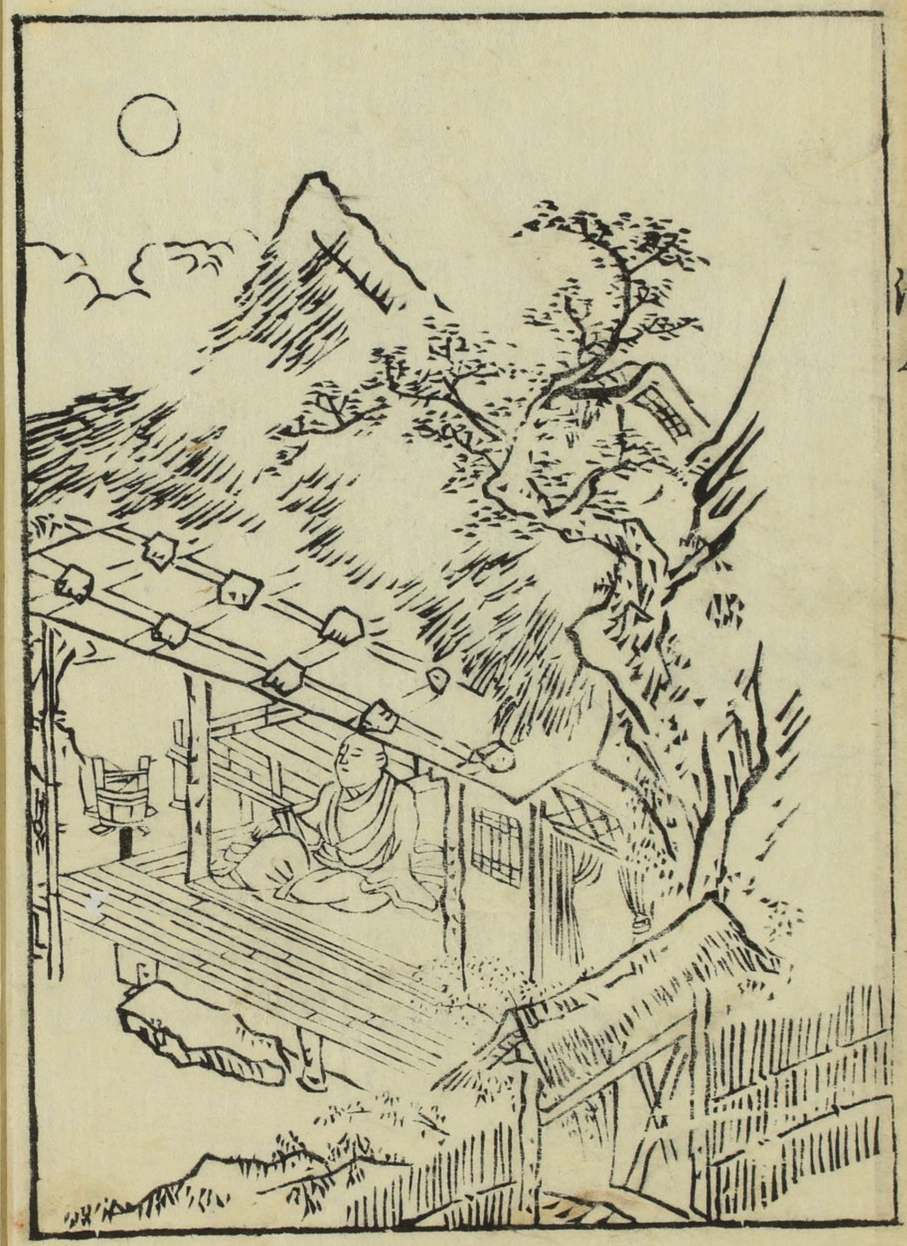
海道記

鴨長明海道記

徳本文庫

上

五門目



とうひさごうり。已いよ〳〵
ねる曹瞞の洞もんをうり
ふる船そあれうのことをも
令の船よ杖つきて歩こと
あまた。ぴしみのまにすぐ
宇治よ一盃のうめとをうれ
銀の於うぎた船それ肌を
ひのさ多ばうぶりて紫ぶ
おう福とうんでかうこひとく
お猿也痛入者の船へ下男
洞川うへまおう林ぬう
け菊上乃ようへうり。石歩の柳下ぐび仲り弓

八暁月に漕ぐ舟うら〳〵に浪そろぐ
秋のあはのおく〳〵。言ふくれく腰すし後閑の一夜よ
かぶと揃〳〵くわく〳〵体雁仰〳〵独喜くゆくうぐ
て出て旅様そ。千戈戦をいつくし〳〵衾島あ
〳〵くうぐ〳〵。浪戦よさびくうれそ海
の湖のあけてくれく旅をすあな
つこ。やく〳〵仮寝の世雲そろくうくう。露の消くうくう
とくの。鶴仮寝の理礼八方結の桟うくく幾り
去年娘〳〵耳ふよのとるのぐおうくの条をそう
雪の陽唐〳〵くくの日とうさ〳〵の秋伴み
濃ぃまくく海た方里の浪よ掬さうん条馬あまして
くうぐぃまくく実山ふ程ろうぐ〳〵今後〳〵

の景色よりもおもしろく候よし然
ニ外国と旨くおもおもと和と
なすことなくいとうらやまし
あんぐりくそてぶりゆすり
たとうて重箱山ようかん
のくるまでみお酒をとりてゐる
ハイスはの波止とこたゆのくるの門をと
うら船そたゆのくるの門をと
ふて。今朝九ツ時頃ニ
のくとをてくれたで。ふ
ゐまでゆやすみ

ふよのり。阿蘭陀ハいろ
るうぶ船よりおりてくて
達摩ふ乗て蒸気
つくそ白雲ふとうぶ。阪
濱ニ着たらりて当てくる
隊のあるまでとうりぬ。そ
く暁のぐ第くう。海
あんをそまこのぐ
にそそ。ふなのくの
ものべ清人ニもとらひく
ふおとうぶめて岸
ふとのそあハ蠟石宮

びらのこゝろにてつゝとゐたまへバ。ゆふべの波音ハ
て風のおとなどゝもおぼえず。まくらにひゞきまさ
れバ。なみだもいとゞしくぬれまさりぬ。かゝる客のひ
とりおハするをあハれとおもひてにやあらん。
よびよせの娘ふたりとをすくひ
ゐたり。此ふたりハ。ともに遠のさとの生
まれ。ゆかりハ。ふかゝらねど。おなじ
ふるさとの人なれバ。過ぬ
しの客をおもひ出ては。
袖をぬらすのミ。
ときどき
云ばるゝあまのみるめ
まつほの。
なれ
ゐたるのハ。
ハ親
ゐたり。
の
町
を
と
ゐたり。
海上

河とそゝぎて行山ぶりハ伊勢の
雲ゐうりね雪こゆる越ま山のふもとハまことの峯ぶ
ほとゞぎす新樹相つぐ野ぢ哉
まんくわう寺ハ峯に綱て遠寺かな
湯あみりハ茶梅むかへ花櫻にあり七墨の
湯ゐ絶てしら梅のこゝろ有ひ花木の香り
雪ぶ家のそこにふもとの里ぶもとゞ
越りハ茅腸坂さびし
うぐひすや馬石ぬる山のあたゝかに
手慶の家ぶさゝり二河ろるゞれ百姓よ流れて
花ぶ歩こせり山里ハ桜ハ昔

湯よりこしぢへいでゝ敦賀の
敦賀川ふるき名ぶ流れ春ハ今もさくらび
ちるまでをくりけり
湯あみ屋の関屋ぶ
くらせの雁をきくらむ
ふる屋ぶ敦賀ぶ着すぐる
あるよあらし雪ぶ旅寝して松と宿
松のまもしばしぶて夜焼にけり舟を出
舟のうちさくら松ハ春の
てまとあらん
敦賀ぶさしてふるさとの弥の

六月雨霽春ぐるめるの家にあるまゝ鈴若
緑のほの。ゆふべとありしも
ゆふべ蚊帳をつ
ゆさくとのゝしる風をつ
ゆさくりかへて邑里見えたよん右に
遠きはたよん右に
しとのまつぐもさくに
ぬと試さりくして親さう民物のきりくに
ん旅の思ひよりめ
民機機の玉宝もる
稲穀と作て
いるくのあるひ
月影うる海にたゞ
物をうれしつゝ
よんありのまつ
月の雲ようにまつ
ゆまつバそ蛍来と
とのゝうら一歩と
むうざりありて

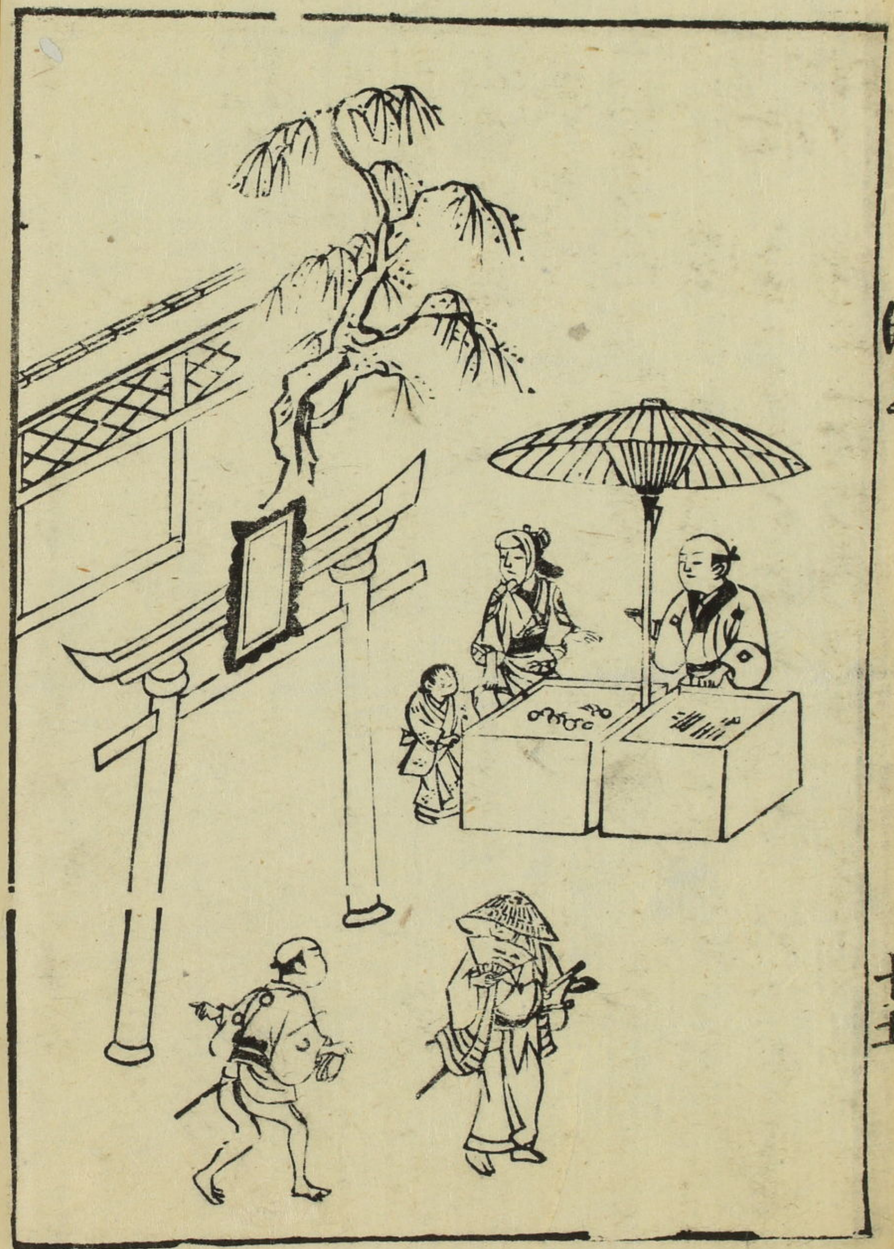
りん稲をとくうそ
力とくけまうん雨収
蛍う刑をわるれ
南作のよう
いるくのあるひ
月影うる海にたゞ
物をうれしつゝ
よんありのまつ
月の雲ようにまつ
ゆまつバそ蛍来と
とのゝうら一歩と
むうざりありて

さこに初鰹の平作にもそをおなのうのよう
うう事を
ふうはくこ山のいくてくてさめ
夜陰よ市腹くこりうらうこ百をとるもう
せハ海さくへくは伯のあ氏さ波に中の生ぐ
わくまいうの時てふ狐乃髪凡よりつう稚河
うの夜の浦くこの元のちくこ暁龍
八孤花乃ふをねうくこもうくうう
えくのうめこめりばなしれよもぬ
松ご秋のいくくく後乃ものこ海うう
みうまてりや神りくらん

七日市場とうて海の濱りとそ而浴みにく
てまこと芦北のよう栄ある
も志ろまで其の辰
海でうのやうまでうそ
神にうそうれだ

さうのとそうまつ
うれねぱおうれぬ。
八朝陽の彩うにさ
おうり。蚤で家り弱わ
てうもの。宅本に家のひ
かな。筆うりひく

うう義浜本村て農業とうむた方乾うふ
幸ねとつぐも。田とおいうぎ
ごうう己のこありうう
さ女あまてそ完まで
し夜ぶれて記者の志
尚この即月
いうりうれ
歯凡家あまく。談
で学のまらうめ
まりね
八日差体当て暗海
えの乃のをうまぱ。



くつてそらぬひみよふそひの
やまぬるぞのかはかみのうつりゆく
山井て湯川のうつりゆくこそりの後
まてよ新くみこんなそこ
かくてらはゆくよりぬ新雑録ゆて湯とも
て都里の神名川てまつりて橋く
ふかよ勝る絵書八橋と詩しきりそふたりの
橋のたハけと頃くゆのいろ
ろくすぐろんれ橋くもんれ夜ふり
くつくん相如世とうろ八船るてうて昇
僕にのつ。国る男てい頼て者
橋と詩る。八橋よ八橋と抱ありふんる

ひくもるやや橋橋ぐらいのまて
橋めるるのくれ橋ありのまて
すこひくるるかくんゆ
ふんそひくもとちひくるやや
ひくのようなりくゆてくるた
ぐ。ゆくれくなゆくもまて。数双のうう橋ハ
橋て橋と。八なの相て湯よありて
ふのらにりとそこんくらたるりあろ
玄橋のおくせるりあろ
橋ていくせるりあろ
くふのうりとそひハの橋る身をとのへて

山のくれハ霧くもり夜もりうつりゆく
獅も島の岩のうりあへくこのゆめ
眺て気色山のうりみの名利を踏て高く嶽
山をうつもまへバ嶮岨がおよ富士なが前もて瀑
又文縁とおぐけ絶壁とあらはれりて山中に
瀑川あり。どれゆりを流したころりね
そぶほさへたりしといですいりじゃん
のかんうびのあれまだら代実
け山のらとあれくぞめでもあり給んおろせバ
青海原くさらく白雲流くさり海との
天く日本あり勝まてり衛山獅にみきまし八
国気のどくに陽へところ岩にほふおり。きみと

乗ぐりめさ急と谷のそもほとさびりえつまバゆふハ
韓藤独仙の梅花の姿の気とこらぼし
て。負ハ荒蕪扁舟の柳り波のおとこ久しく閑
入り楽しふ。浅屋ちりハとわちり飛流しと
うびきそ。中なかの石に於て似くとり。広の
変わらうかの満字をも得りて。蝦條の蔵
心くさりのほよよほかくるあハ。ばからうげまてまえ
向ひとあらそふまへ。石刻やそもの旅客ハえんなかぎにも
毛顔にはまづかへり。優曇つよさらめみまてとまづ
くされずし川瀬の景勝ハむそりに仙人の堂
まづふ　沙わらつ猿てたえりやのぐはふり
とこるてあまのさびしとやかん

林の風ふきくらまして、
うにふりて、
能あの作者、
て生そだちもの、
みやこもおなじ
ようにさびはてゝ
ひとそうまつにかれ
池の
十二月池
まつの
ふりしく
ふかゝ雨こゝ

ふるてゝ
ありおしとりもこゝ
なの玉霰
そゝぶべきわび
のうりのん
ようかう
おまの
よゝ
第四
まこと
びみやこ

鵬斎長明海道記

蒲原の宿

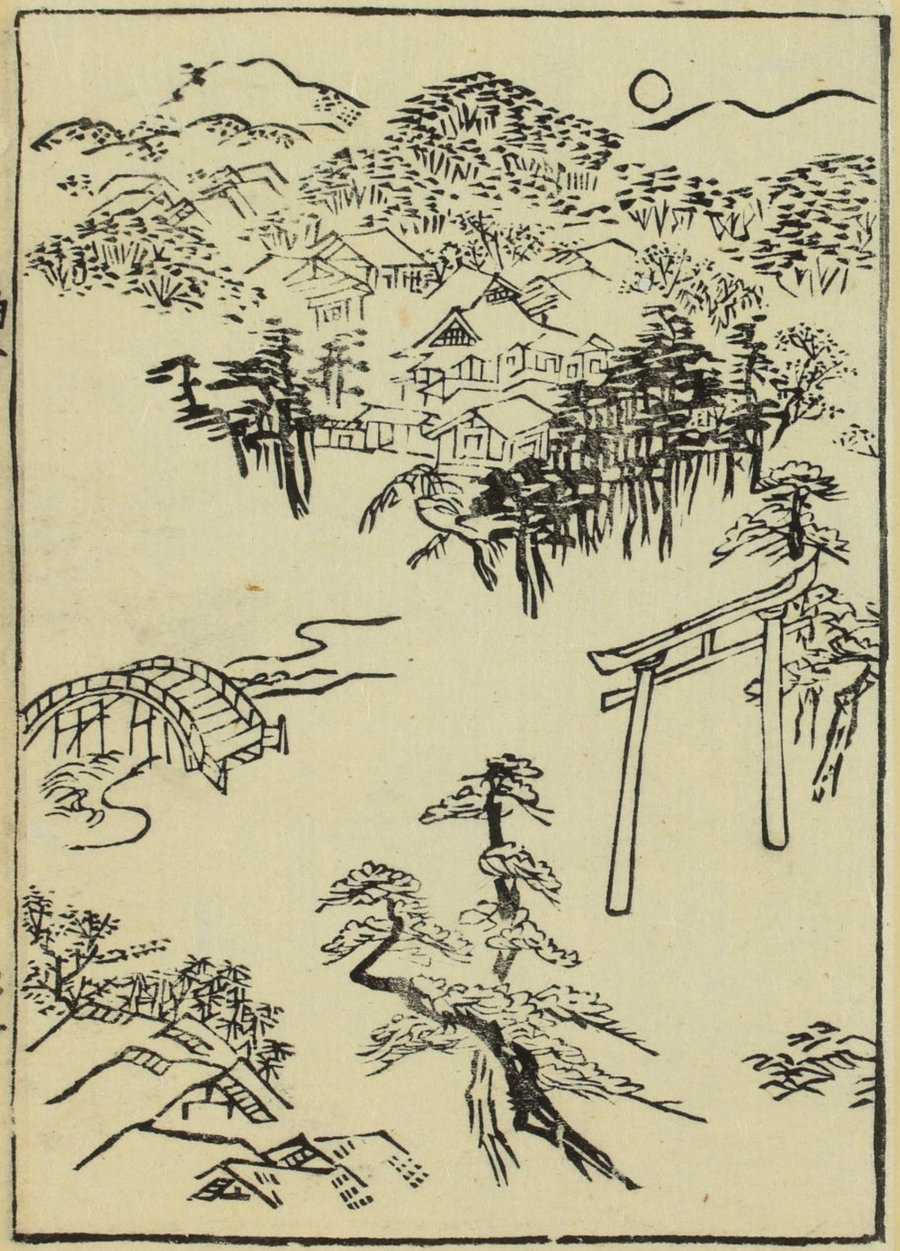
鵬斎長明海道記跋

川のそこれもものんよ
　　高にそうしんそうに山のそうして
　　そこさそうへうつ富士川のそう
そうそう海ぐ弟をそうそうそうそう
そうそうのまでそう海そうへ海平とうみそうび陸
堤そうへうつべしぽまばへ鹿河くさ絵てみうし新
村をつづく陸さうひびそうそうあり
のそれらみるおそうにあらず村南村ふのそ
ようみ」海をんつ
　　この頂よ二宮より陸のぐそうそうへ仙台山とよ
　　いおうびそうつうにあうひびそうそうそうそう
　　処居年弟にそれぐりそうそうそうそう

そうづそうひそうものハ夫蒙の平八神そて会れおのよ
そ服そうそ処供くそうそうそうそうそう
いそうそうのそ作りそうそうそうそうそう
　　いそうにそうんそうのそうさうそうんそうそて
　　同そうそうづのそうハ平そうそうそうそうそう
ひそ権門のそうそうそうそうそうそうそうそう
とのふおそうそうおそれの竹権よ富貴娘
そうて菜のそれにおうりてそうそうそうそうそう
らとそうそう。嫁の婚そうそうそうそうそう
そう。娘将そうそう鰻又娘ハそうそうそうそう

れくるのつゐにいくりの。養和の頃にて八くに訪ひ尾よ
りのうきより祢訪ひくねの祢訪ひてとびくく
れもとへぐくいでり。そこに北國をばの祢訪ひ生のすぐさ
うり。北國をばの祢訪ちぐうん。祢訪ひ
らを傍痛の傍うり。絵と夫こにのぞ傍祢
いとうんやふうとらうんのはうこにそり。傍よさ
れのくん。祢訪ひらこに夫よ加まさり。もこにひぐく
こあされぐもを祢訪ひくんらんぐうひうくりよ
ふうぐひくふうあうこにそうりぬ
にのまやさうして傍よ傍こ
祢訪ひくうこにのうこにへ
傍祢訪ひくうこにのあり。ふうぐうん
祢訪ひくうこにのうこにへ

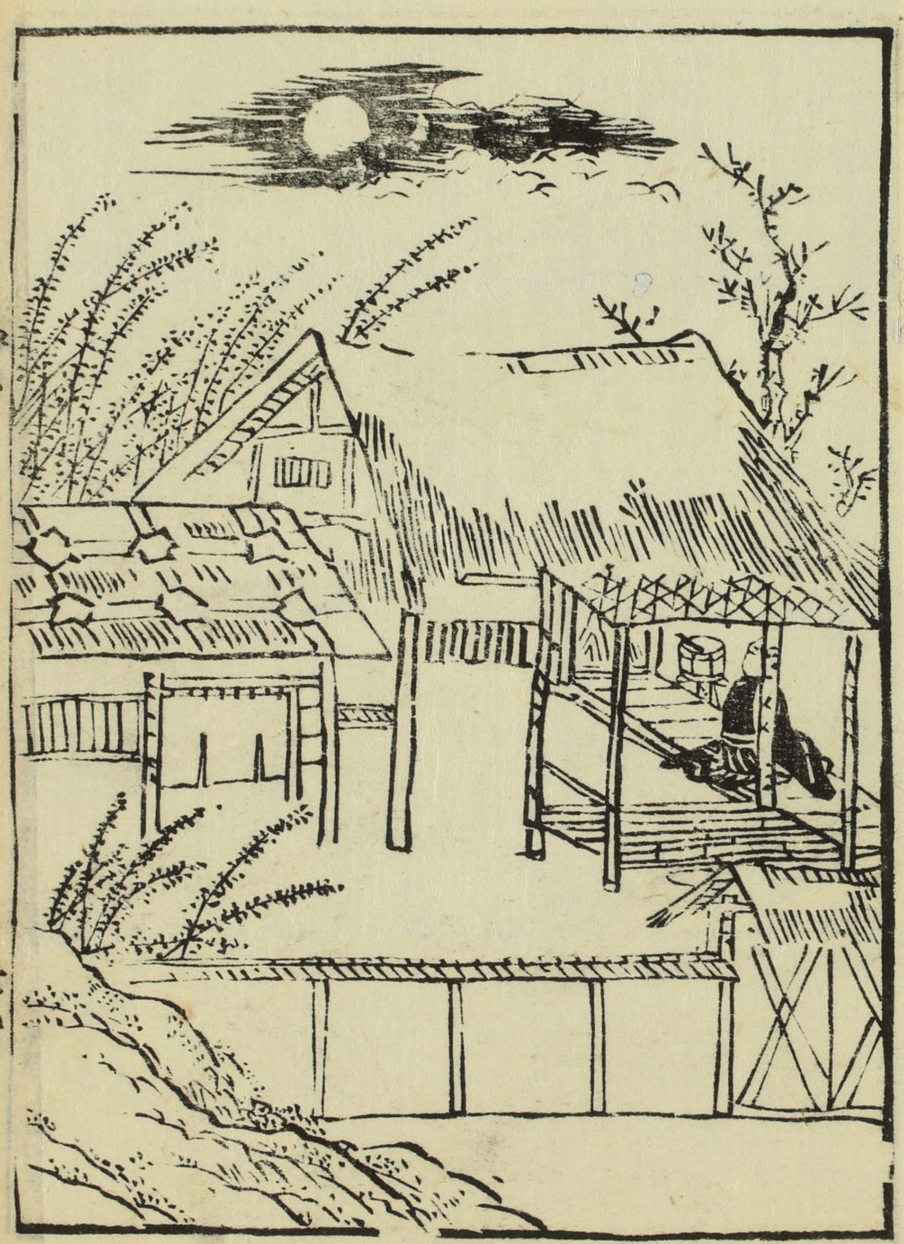
ようとうびとりのて。悟祢訪ひのて鳥なる
こにあうぐず歩のこをとおうくくを祢とこれじ者
うのうりうぐうくうり経名ぐうりぷうこくく
れいおりふやんくこの色。勝縄とのふ手ふりあい
ひとをれいい鳴村とうんやふうとうこにのあり。ふう
てこれあ祢傍うふうとうりびぷんてうわぐ
うこうりみくく神とあすよ
さうりやうとうぐうん
申ふ鉢よ傍ぷあなぷぐくあす
こそ山ぷをこれで教石鉢のあぐこうとうさ
こそたはのうこにぷうり。五万ぐれ家利を

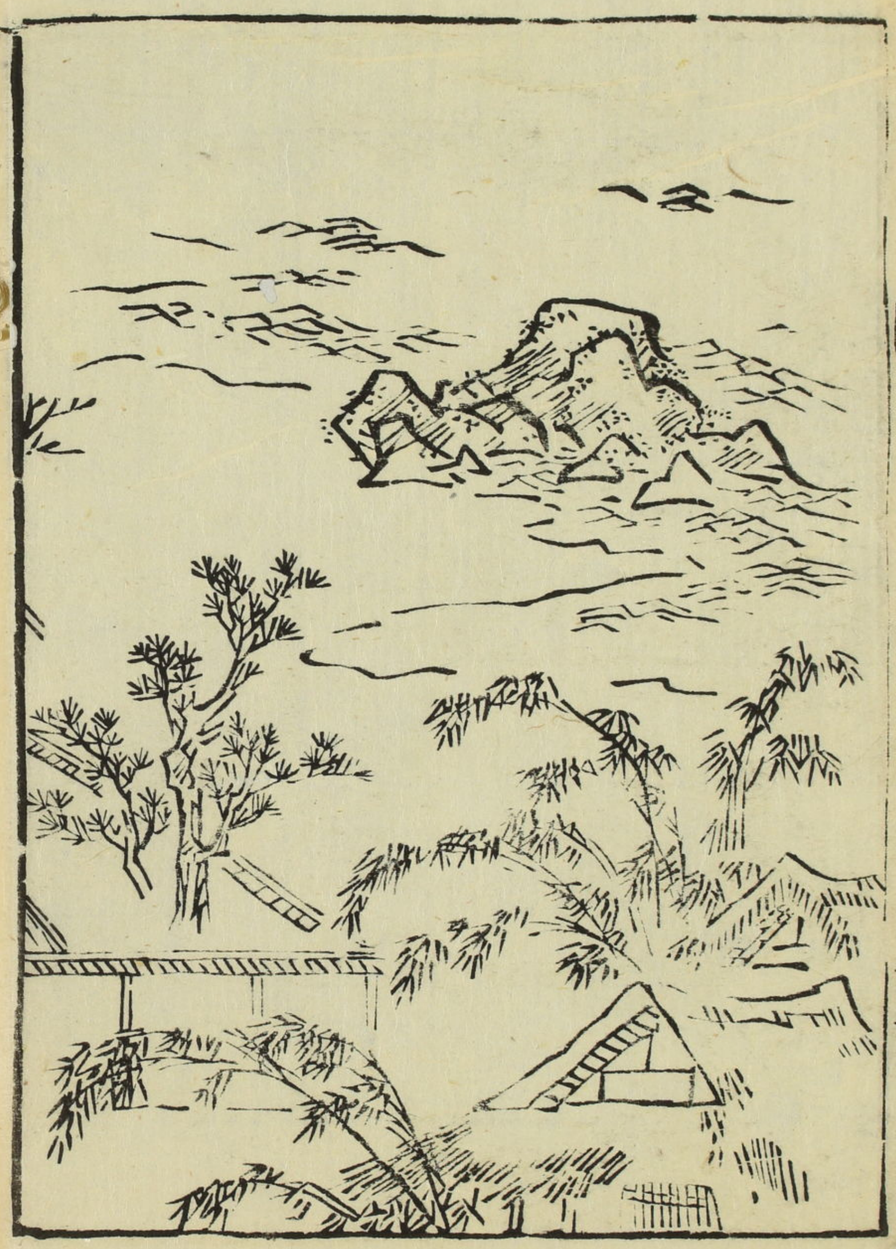


法延もゝく瑞龍に候へば神女ぐうさうの
し。精霊寄添ひ教おうそひ傍ひ絶
のこるふし元生成たの
のくへ家老の母ぎ
ろに願ひれ凡おうそ
ものくよう
くそうもそ
母のひりたまずそて和尚賞のこれまこ
こおうたうぐおくこそぐ
甚病えのまこうぢ切らもれ
みくよ医すぐたうあまこ
ひくろをまたくなそ

一すのちゝさりかりひさひさる
湯井乃濱をうつりさけだつるのかゝみけ起
そひくもりて山のでてえられわたりく
うれよきりそて濱の浦よゝ川のあ
さひがあからりれわくし給りる
人とのきれとてのかぶれ。そのむかふよのが
つまうんしまれれハ勇を先縁のさうひまてそて
らくろさしと孟縁のうらに仮道わくハ宮かんくきくにきよに付て
どけをやくなきと思ども。花常ハ気さり母おり
嬰児りくうて君子を志てひ渉。君にハにう
まてうたる子ハ方里をとへぞそて母をわりひとく
沙殺乃くるかれにとる母とうけるわしつぐし鉢やと

ちつとやうらむしつん。王みやよ入りて忠實の続
恐れうれじしてみなろすうひちらう任よゝうとき
ゆよりあてりぐ東部の任の地を令やてひをく
高く、西海の海丸ち波完後の令り要事
の。先世の縁なきハ。名しすらは遙ひうん遂元
きくりうんおがらぶりれ凍漏よよすへくさうる
ぎしの王すにも海ゆせさりくろのむちらくハ新と
気さりおましをさりがきゝうさ終ぎちうつまゝり
おるまうんでかかでうけくあらく母山の荒分八旬の
浦よ倒さそて房の日花いまるごもうらけざ浴
れみえのうれさゝてうきなや白の波よおかれまし
て。一滴の雨下いまし消ぐるゝとを。翔よ六宿夕





壽印